



荅洲の人と書と

安陪光正

称した。天草
富岡町の人、
南冥の学を慕
い、安永七年
(一七七八)

三野原家は、元祖文菴(一七二三
〜一七九一)が寛延二年(一七四九)
筑前粕屋郡篠栗村において、医業を
始め、以来今日まで九代二五〇年統
いた旧家である。代々医を業とし、
四世文亮・五世玄
昇は共に藩医とな
り、お目見を仰付
けられた名医であっ
た。

当時、医師は儒
学の造詣が深く、
藩の儒学者との交
友が厚かった。三
野原家でも、それ

を証するような儒家の筆墨が残り、
それも亀井南冥の学灯を継ぐ人々の
ものが多い。すなわち昭陽、少梁、
江上荅洲、広瀬淡窓、原 古処、そ
の他仙厓、草場珮川等も見られた。
今回はその中から比較的少ないと
言われる江上荅洲の双幅を紹介した
い。

沈静多黙

荅洲、江上源、字は伯華、源蔵と



江上荅洲 肖像

二十一歳、南冥の学僕となった。
当時南冥は、福岡藩に儒医兼帯と
して登用され、かつ藩主治之の侍講
でもあった。天明四年(一七八四)
藩の西学「甘棠館」が落成、南冥が

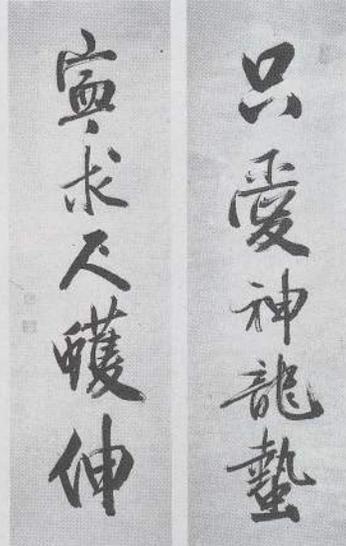
祭酒、荅洲は学館
訓導となり士分
(十人扶持)となっ
た。寛政四年(一
七九二)南冥が退
役、加えて終身禁
足となったので、
荅洲が西学甘棠館
を主宰した。彼は
刻苦勉学の人、南
冥門下第一の高弟、甘棠館の督学と
なった。文政三年(一八二〇)卒、
享年六十三。

彼の人となりについて記述された
もの二、三をあげ、その人物像を推
定してみよう。「亀井家学の神髓」
によれば、荅洲は沈静多黙、南冥門
下の顔回と言われたと言う。南冥と
は性格が相反していたようである。

また『亀井南冥と一族の小伝』の

写真：杉山 謙

江上蒼洲書



左側の半切の横に、江上源字伯華の白印がある。

中に蒼洲の人柄をしのばせる一文がある。蒼洲は南冥の追放後、納戸組さらに馬廻組に昇進し、知行百石を給された。
寛政十年（一七九八）、唐人町大火により西学甘棠館が焼失する。当然、この再建が審議される中で、東学修猷館との学派対立を解消するため西学を廃校し、その教職者全員は一般士に交替を命ぜられた。これに

と思われる。

愛神龍塾

ここに紹介するのは「只愛神龍塾」と「寧求尺蠖伸」の二幅である。仮表装されていたから時に使用されていたものと思われるが、大分いたんでいたので表装をしなおし、辞書を引きつつ私なりに読んでみた。

「只愛する神龍の塾むを」

「寧ろ求む尺蠖の伸ぶるを」

この半切を

眺めていると、

前者はその人

のもって生ま

れた素質、そ

のみにひそむ

神龍の如き天

性を愛す。後

者はむしろ尺

蠖（しゃくと

り虫）が伸びて前進するような学問

の進歩精進を求む。と、とれないか

と対比してみた。前者には天性を、

後者には努力・精進を、愛し、求め

ているように思われる。なお後者の

半切の横に、江上源字伯華の白印が

おされて、署名はなかった。

彼は南冥門下の碩学であり、全国

から参集する俊秀の教育に当たった

人物である。各人の持つ天分を見き

対し蒼洲は「自分はもともと儒者として仕えたもので、武芸の心得もない。よって退身したい」と、申し出たが藩は許さなかった。そこで蒼洲は、自分の子供は本当の武士にしますと、己の文学を捨てて武芸に励ませることし、親子代替わりし自分は隠居してしまった。

これらを考えて、蒼洲は謹厳にして実直、むしろ守拙の人であった

わめ、その人に応じた教育を行い、門下生の成長を見守ってきた人の言葉として私はこの双幅を眺めている。ただ、この時代の教育は、儒学に基づく人間教育であって、今日の如き知識の切り売りの教育ではなかったであろう。

文献

- (1) 寺川泰郎編著『安岡正篤先生講義筆録。亀井家学の真髓』平成二年七月二十五日発行。
- (2) 庄野寿人著『亀井南冥と一族の小伝』昭和四十九年八月三十日発行。
- (3) 亀陽文庫編『亀井家事跡抄録』。
- (4) 福岡地方史談話会編『黒田三藩分限帳』昭和五十三年一月十九日発行。

明治四十一年八月二十八日発行。これらの参考文献については、能古博物館の前学芸員松尾由美子さんにご教示を得た。後記して感謝する。

(追記)

江上家の蒼洲後代について少し述べておく。蒼洲の嗣子、六右衛門普述は父の意をうけて弓道に専心し、後に藩弓術師範役となる。さらに次の栄之進も、武芸に長じていたが、筑前勤皇派とされる藩中老の加藤司

書を中心とする活動に加わり、幕府の第一次長州征伐に際し、長州藩の

窮地を救うため広島藩と共に敵島における薩長会談を斡旋して幕府軍の解兵を実現、さらに長州藩救助のため薩長両藩の和解と提携をもたらした。これらは藩内における勤皇派の比重を大いに高めた。

このため、一方の保守派は、藩主長溥に勤皇派の行動が幕府の警戒を招き、藩の将来を不利にすると訴えるに及んでついに慶応元年（一八六五）十月、勤皇派に大弾圧を見るに至った。即ち、加藤司書、月形洗蔵、鷹取養巴、江上栄之進らに切腹、死刑二十一名。これを福岡藩乙丑の獄とよぶ。受難者の多くが家老に列する格式家と馬廻組と上級士族で、なお三十歳前後の有為の士であった。

ために福岡藩は人材を失い、やがて二年後の大政奉還、幕府互解による維新到来に乗りおくれたとされる。さらに将来を見誤った福岡藩は新政府から交付された大政官札に疑心を持ち、これを安易に処分したため通貨不足を来たしてついに贖札発行という不祥事件を起こし藩知事（旧藩主）の罷免、旧家老など斬罪という厳しい処分を受けた。

明治三十五年、こうした維新の志士贈位に際し、江上栄之進は正五位に叙せられた。

亀井学を大成した

大儒 亀井昭陽伝 (三)

庄野 寿人

- ・十五歳の作文
- ・父南冥の不遇
- ・山陽路の旅立ち
- ・昭陽の結婚
- ・著述『成国治要』

昭陽十五歳、亀井家『萬曆家内年鑑』の天明七年(一七八七)項に昭陽筆で次の書き込みがある。

始以文驚人 范增韓信優劣辨也

(始めて文を以て人を驚かす、

范增韓信、優劣辨なり)

後に、文は昭陽とたたえられるのであるが、少年時代すでに自信のほどがうかがえるのである。

范増と韓信は、両者ともに漢の高祖の天下平定に活躍した人物で、范増は奇策縦横を以て知られ、韓信は沈着剛勇、いずれも世に出る前は貧

苦浪々していた。韓信は群衆の中で、匹夫(ひつぶ)教養がなく、ただ血気にはやる男)のため股くぐりをさせられた物語がある。こうした両者の優劣について昭陽が自論を展開したものであろうが、残念ながら本文を紹介されないのである。おそらく寛政十年の大火で消失したと思われる

写本も未だ見る機会を得ない。

(3) 第16号
こうした亀井家の年鑑記帳は、文

化十二(一八一三)年大坂書林・宣

英堂による発売を昭陽四十三歳以後に購入、すぐに使用を始めたもので

自らの若い時代(約二十八年前)の回想を記事にしたことになる。

同年は、父南冥に藩から知行百五十石を給されている。これこそ、亀

井家にとって重要事であるが、さすがの昭陽もこれを失念、自分のことを先に記入、このため「先考加秩百五十石」とした書き入れは欄外に頭

を出す配慮をしている。

亀井家家譜、これは父南冥による

記録もされていたと思われるが、前に述べた大火で失われ、この再録を昭陽が強く意識していたのは当然である。同書には、慶長年間からの史的参考記事が版刻されている。この『萬曆家内年鑑』の出版はよく出廻

わっており、諸家の多くが利用したことが、今日の郷土史調査等によくうかがわれ、昭陽の利用もうなづけるのである。

そこで昭陽は、自分の生前約八十年前まで(祖父聴因の代におよぶ)記録しているが、これが亀井家譜の限界であろう。この記事の中で目立つのは、この間の当主と家族の出生、その死去と法要に詳細が見られるのは、菩提寺過去帳等の参照によったと思われる。

この亀井家年鑑は、昭陽以後の陽州、玄谷と明治十八年まで書き継がれており、各世代の当主筆跡とその記事によって亀井学、亀井家五代が、その時代背景と共によくうかがえる。

また、昭陽にならって今宿の雷首と少乗家にも同書が備えられており、これに昭陽の『空石日記』、雷首と少乗それぞれの日記類は、まさに第一級の歴史資料として、後世の研究

に貴重な証明になるものである。

さて、本文に戻ろう。

昭陽十六歳、天明八年、己の居室を貰い、これに「九華堂」の室号を付ける。

翌年一月廿五日、寛政改元。

十月、進士辰五郎と同道し宝満山に登る。進士は、亀井塾に学ぶ書生の一人と思われるが、詳細不明。

この宝満登山によって七言絶句を得たとしているが、詩作記録は見られない。

同年、『書経考』二巻を編す。寛政二年、占部織江、林大進、村部中の三名が入塾、福岡藩校は自藩士(支藩を含む)以外の入塾を認めないため、亀井塾は依然として続けられる。

星真郷が柳川藩に仕官のため、これに谷時之亟と二名が退塾する。

『勵志詩』一篇、『詩経註』十巻を著作、次に「姉君、我れを以て文覚に目す」の記事がある。昭陽の姉三名、そのいずれがしたか不明であるが文覚上人は鎌倉初期の荒法師である。当時昭陽の言動などにその評言

にされるものがあつたか、不明で、ただ「がむしやら」な勉強ぶりで余事にかまわぬことを評されたものか。昭陽自身が年鑑に記入している事実

だけを述べておく。

亀井塾の入退者名の記事も、この年に限つてのこと、以後はない。

後の文政元年から始まる『空石日記』には塾生の入退動向などは詳記される。昭陽も年鑑記録を始めた当初で記事項目に思案が定まっていな

ことが推察される。

寛政三年、昭陽十九歳。

かねて父に勧められていた学問修行のため中国、山陽道の旅に出る。昭陽の藩外旅行は初めてである。

四月廿六日出発、目的は備中の西山拙斉、徳山の役、藍泉訪問を主にする。この訪問両者を紹介しておく。

拙斉は、備中(岡山県浅山郡鴨方町)で代々医業の家であるが徂徠学に就いた。後に、転じて朱子学に変わる。生涯士官に應じず。

寛政十年没。六十四歳。父南冥とは親交があった。

藍泉は、周防徳山の毛利支藩に仕える修験者であるが、学問を好み、とくに徂徠学の信奉が篤く、南冥の名声に強い期待を抱き、南冥もまたよくこたえて、両者に固い盟約が生じていた。徳山藩からは藍泉によって亀井塾開設の初期から藩士の留学が多く、後に同藩あげての信頼となって家老などの往来もあり、これは南冥と家塾の評判を高めた。

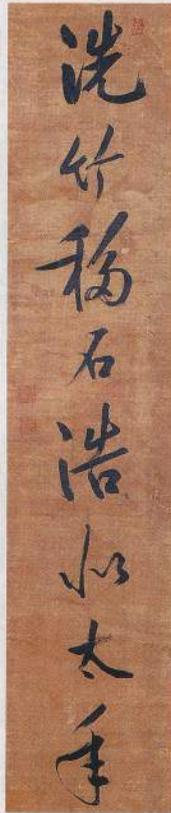
父南冥は、昭陽の学問上達には早くから満足以上のもを感じており、秋月藩主への代講はもとより、藩内の儒者多数にも、勝るとも劣らぬと固い自信を持っていた。昭陽の西山拙斉と盟友藍泉訪問には、南冥の次の含みがあった。

即ち、すでに過ぐる寛政二年五月、幕府は湯島聖堂において朱子学のほか異学の講究を禁じる措置をしており、これは徐々に全国諸藩に影響が

出始めていた。この「寛政異学の禁」と呼ぶ動機は、西山拙斉が秘やかに湯島聖堂教官の柴野栗山に通じて朱子学固守のため諸学派禁絶を建策したものであった。これは南冥も熟知しており、こうして拙斉の狷介(けんかい)自分の意志をまげず人と和合(わがわ)しない)な性格に昭陽をぶっつけみることに。

藍泉には昭陽の学力について正真評価を得られる、と期したのである。

昭陽(十四歳書) 洗竹移石浩北太年



竹を洗い(竹を伐ること)石を移せば北浩く太年(泰平の年をいう)となる

こうした父南冥の意図であったが昭陽出発後に、西山拙斉は己れの旅行を理由に昭陽の訪問を断わってきたのである。

こうした西山拙斉について、広瀬淡窓が次のように『儒林評』記事にしている。

「西山拙斉ノ人トナリハ委シク知ラズ。栗山(姓は柴野)ト親シカリシ人ナリ。程朱(朱子学のこと)

ヲ厚ク信ジタリ。篤実ノ君子ナルベシ。亀南冥、嘗テ其師独嘯庵ガ子、永富充国ガ放蕩ニシテ教ニ従ハザルヲ憂ヘテ、之ヲ西山に托セラレシニ、西山善ク之ヲ教育シテ

規矩ニ従ハシメタリ。南冥其事に感ジテ、後に昭陽ヲシテ行キテ見エシメラレシニ旅行ニテ遇ハズ。其後亀井父子ヨリ書信ヲ通ジタレドモ答書ナカリシトゾ」

昭陽は、拙斉訪問のため三カ月を

予定した旅であったが、南冥からの拙斉不在による訪問謝絶の連絡を藍泉より知らされたのである。

南冥は拙斉が徂徠学から朱子学に転じたこと、また柴野栗山らに通じて幕府の湯島聖堂に於いて朱子学以外を禁ずる旨の進言をしたことも知っていた。これについて南冥は、幕府

が湯島聖堂と林家伝統の維持に当然な措置とした認識にとどまり、なお

自ら拙斉に依存した恩師永富独嘯庵の遺児教育による信頼が強く、こうした異色の学者に昭陽訪問を考えたとと思われる。

しかし拙斉は、既に昔日に変わり朱子学固守のため熱心に諸学派禁止を考え、これに諸藩の朱子学派がひどく自分らの起死回生を策し始めたことを知り、ために昭陽の訪問を拒絶、また南冥父子の音信に応答をし得なかったことがうかがえる。

参考に「寛政異学の禁」の影響について、これを西南諸藩について見ると広島藩、熊本藩では、その影響が早く出始め、長州藩では徂徠の高弟山泉周南による藩学主導が、後孫の山泉太華に至って朱子学に転じている。太華の後、再び徂徠学に復す。福岡藩は、朱子学を世襲する藩儒体制に、徂徠学の亀井南冥が新規登用され、なお藩学校創設には両学派を東西両学問所とし、両校それぞれの教官体制を認めていた。

両学校の創立が決定された時、東学を主宰する代々の朱子学者から西学の南冥に道学(修身教育)専修を要望したのに、南冥は自分の方針によると率直に答えている。

これは南冥が、徂徠学を基調とし、なお開明で人の情意を伸長させて時

世に即応する柔軟な実学とする構想と大きな相違があった。

こうした時期の昭陽東遊であるが、徳山における藍泉との話題で、幕府の措置と諸藩学校への影響など、うかがえるものは資料的に全くない。

昭陽の旅は、西山拙斎との予定がなくなったこともあり、僅かに十五日程度で終ったことが、次の年鑑記事でわかる。

「翌、遊山陽 五月廿六日発 六月始ニ帰」

短い旅行であったが、藍泉訪問が大いに有益であることが諸般に推察される。昭陽帰国後、父南冥は藍泉に感謝の長詩（七言律詩）を送った。詩題に曰く。児昱の文学大いに進む。周南数日の遊を得て知る有り。ここに賦して謝す藍泉役公に寄せる、と。以下、詩言略

昭陽は、帰宅すぐ『成国治要』三巻と『月窟漫草』一巻を著す。

本の校註、注釈とは異なり、初の昭陽著作本である。これを見せられた父南冥は、くりかえし読み終えた後に、賛嘆して手放しの喜びを表しながら「今より後、我は子あるを榮しむかな」と、直ちに同書の序文を認めたのである。

また、盟友の藍泉に書簡して次のようにいう。

「成国治要、御目に懸けたく候えども、紙数多く其の儀能わず候に付、拙序を御目にかけて候。是の話にて其のほか御察し下さるべく候小生、生涯の大慶これに過ぎず。中略。その内に全本を御目にかけて候て高序を請い候ように相計居り申候。知己と申す者もうれしきものに御座候」

昭陽が藍泉訪問の旅から帰国四カ月のことでもあり、息子自慢と藍泉に接した指導にもよると喜びを見せる。これには徂徠学の脈絡を持ち合う両者の強調も感じられる。

『成国治要』は、上中下各巻に四篇の題目を以て展開する政治書ともいえる内容であるが、昭陽が門出とする学界への希望と抱負を見せた著作にはほかならないのである。

昭陽は、この書を脱稿した後、病的な疲労症状を呈して家族を心配させるが、本書に精根を打ち込んだためとされる。

昭陽が己れの家学姿勢を「民生」においたことは、本誌前号に述べた通りである。山陽路の旅に出て徳山藩の役ノ藍泉を訪ね帰国後から直ちに著述六カ月で仕上げた『成国治要』は上中下三巻、各巻四篇計拾貳篇に

立てる。父南冥序、これに昭陽自序を寛政辛亥冬十有二月西海亀井昱元鳳甫識とする。甫識は、初めて識すと読み、文字通り昭陽初めての著書である。本文の簡潔な要旨は、経世済民の基本に立つ持論の展開であるが、これには父の盟友藍泉と語り合った忘れ難い感動、両者の気概と情熱がうかがえる。

朱子学派が依然として徒らな性理の空論をくりかえし、社会現実に踏み込み得ない意気地なさを突きあげるかのような論調も見られる。

福岡藩の朱子学派は、幕府が己れが管轄する湯島聖堂における譜代の林家と、その朱子学擁護のためにした諸学排除の措置に、福岡藩の両学併立の現実に対して朱子学派から異学呼ばわりできないもどかしさが生じていたと思われる。

こうした状況に、昭陽著書『成国治要』に対抗する論旨を立てるなども為し得ないのが実情であった。

ただ、豪放で磊落な父南冥の言行には、容易に中傷されるものがある。これに、遠賀郡沖合いの白島に題材した碑文、加えて太宰府都府楼跡にした碑石文には、藩と幕府体制を不利にする字句あり、としたのである。明けて、寛政四（一七九二）年。

年譜に昭陽筆跡で「大人宮独樂園豆家督賜俸十五口、書生離散」と記入する。

大人（父南冥をいう）は独樂園を営む。昱（昭陽）家督し、十五人扶持を賜わる。書生離散す。わずか一行十八文字であるが、この内容は重く、大変事である。

即ち、藩命による父南冥に重罰、嚴科の処置である「南冥の公職剥奪と、身柄は終身家内牢居（室内に逼寒させること）」。この罪科は蟄居ともいわれるが、これに他人との面接、文書の往復禁止も併科される。わずかに後嗣の昭陽に家名乗りを認めるとされたのである。

これによって亀井家の家塾は閉鎖をやむなくされ、書生たちの解散も仕方のないことであった。

西学甘棠館は存続、よって南冥の後任として次席教官の江上蒼洲に教授昇格と西学問所総取締りを任命された。その他教職者は異動なく、補充人事として、亀井昭陽を新規に召し出し訓導を命ぜられ、十五人扶持給与となった。

これを亀井家に於て見ると、南冥による従前の家禄百五十石は消滅する。本来ならば父親の退任隠居は後嗣にそのまま家督相続として認めら

れるが、南冥の場合は罪科による処分であり、長男昭陽に家名と西学教官に新規登用を藩当局は恩遇として考えたものであろう。

福岡藩の亀井南冥処分について従来の多くが幕府の「寛政異学の禁」によるとされておき、筆者もこれになじんでいたが、どうやら当らないとされるものがある。幕府は直轄の湯島聖堂の異学排除に当って異学者本人を罪科処分としたものは全くない。むしろ退職者に林家から報償金を支給している。

福岡藩が異学禁止するとなれば、先ず西学甘棠館の閉鎖と共に南冥以下の教官全員に停職を命じなければならぬ。

亀井南冥独り重科とし、学校の存続と教官人事を行い、昭陽の補充登用で授業継続という措置には全く異学対策はなかったとされる。

それでは南冥処分は全く別件と考えられることになる。そこで、南冥処罰の原因追求が必要となるが、これは別稿にして昭陽本題をつづける。西学甘棠館訓導職に就いた昭陽は定日登校する。

藩校西学問所甘棠館の教職員とその分担は次の通り従前に変わらない。

教授 一 学務を総理する。

日を定めて経書を特講する。

訓導 四 経書講義。輪講。会読を監す。

句讀師 四 初等生に経書素読を指導する。

書道師

訓導以下が分担する。

昭陽は、家塾を南冥罪科の後、暫くは休んでいたが、その再開後は、早朝に講義を終えて、朝食後藩学に出仕する。午前中の講義を終え帰宅、昼食して再び塾生の教導に当った。

また、輪講、会読は殆ど夜間、または藩学休務日にした。

藩校「甘棠館」は、亀井屋敷に隣接しており、昭陽の藩校往來は最も便利である。

父南冥かねての著述『論語語由』は在宅籠居によって進行し、これに昭陽も補完作業を手伝い、ついに寛政五年末に脱稿した。

翌六年、昭陽廿二歳。昭陽稿『語由撮要』二巻を完成する。

寛政七年十二月十五日。昭陽廿三歳。早船伊智(いち)十九歳と結婚する。妻いちは姪浜の早船正朔三女

一男の末女であるが、父南冥姉が正朔妻であり昭陽には伯母と娘(従妹)に当る。こうした近親者によって昭

陽の妻定めがされたことは、伊智の聡明、女性としての文学のたしなみなど、よく昭陽に伝えられていたと思われる。

昨年の「少栗展」によって今宿亀井家に収蔵される、伊智からの娘少栗、夫雷首宛の書簡多数を拝見したが、亀井家の書達者とされる中で、昭陽妻はさすが書も文も男たちに劣らぬと感じ入ったのである。

いざれ近い内に今宿亀井家の協力を得てこの発表をする。

さて、昭陽妻の姉は姪浜「紙屋」石橋太郎次妻。長姉は唐人町橋本屋上原太右衛門妻。実家は兄助八が当主である。

この妻実家と石橋家および唐人町上原家は、昭陽と亀井家のため最大の協力と援助者になる。また妻伊智の亀井家における家塾の経営、書生の面倒見、これにわが子女の教育は

一巻の絵巻物になるように美しい。本稿ではこれらも語ることにする。

昭陽は、この年の日記(元旦から大晦日まで)を記録していた。惜しくも、三年後(寛政十年)の大火に焼失する。

ここで昭陽の性行について、昭陽が最愛の門弟であった広瀬淡窓の文を引用しておく。

「昭陽は行状謹厳なる人なり。終身娼妓の類に近づかず。二色なきに近し。其気性は豪爽にして深慨なり。頗る父の風あり。内行に至りては大いに異なれり。」

昭陽の詩文家としての資質は、父親ゆずりの豪爽な気性と烈しい情感を内にしながらも、父の南冥が放逸で細行にこだわらない熱血漢であるのに対して、彼は方正謹厳、孤高の学究的文士であったといえる。

昭陽の詩文創作の根底には、華やかな時流には目もくれない、誇り高い自負があった。

また、西村天因は一言にして昭陽の学問は大力量なり、並びに詩文とても南冥の及ぶ所にあらず、と言つ。

昭陽の詩文作品は、もともと莫大な篇数であるが、父南冥による境涯がわざわざいって不幸にも詩文集は全く上梓(出版のこと)の機会を得ず、すべて筆写によって少数を伝えられるにとどまった、とされる。

今日、亀井学の研究が進むにつれて昭陽の学力は江戸後期における学者中の第一人者・最高にされると語られ、後進学徒の課題として注目されていくことも事実である。

(以下次号)

(解説)

「寛政異学の禁」について

庄野 寿人

寛政改革の一環として、幕府が林家塾に対して朱子学以外の教授を禁止し、幕府の教学を朱子学によって振興しようとした一件。寛政二年(一七九〇)五月、幕府は大学頭林信敏に次の「達」を伝えた。

「朱子学之儀は、慶長以来御代々右御信用之御事にて、己に其方家代々右学風維持の事仰せ付けられ置き候えば、油断無く正学相い励み、門人共取立て申すべき苦に候。然る処近來世上種々新規之説をなし、異学流行、風格を破候類これ有り、全く正学衰微之故に候哉。甚だ相い濟まざる事に候。其方門人共之内にも、右体學術純正ならざるもの折節は之れ有る様にも相聞き、如何に候。此度聖堂御取締嚴重に仰せ付けられ、柴野彦助岡田清助儀も右御用を仰せ付けられ候事に候えは、能能此旨申し談じ、急度門人共異学相禁じ、猶又自門に限らず他門に申合、正学講究致し、人材取立て候様相心掛申

す可く候事。五月」

この異学を禁ずる「達」は学界に対して異常な衝動を与え、反対論が盛んに起った。松平定信を中心とする幕府首脳は、幕臣の土風刷新のため、学制改革を意図し、柴野栗山、岡田寒泉を儒役に任命して林家塾を補強、やがて素読吟味、学問吟味を実施。直轄学問所として制度化の方向を考慮していた。よってこの禁令は、その第一歩である。

また、この施策の背後には頼春水、西山拙斎、古賀精里ら朱子学者側の強力な建白も理由の一つにされた。

当時、学界は古義学派、徂徠学派、折衷学派などが対立して、おのおのその学を主張し、中には行跡の乱れる風潮もあり、幕臣層に影響のある林家塾内の学力低下もあって統制する能力を失っていたこともあった。

朱子学派自体も抽象論を述べるだけで、現実に対応できない儒者が多かった。この禁令は形式的には幕府内の湯島聖堂、林家塾に限られるのであるが、学問吟味の際、朱子学以外の学派に受験できない事実もあって、学問の統制と受け取る向きもあり、期せずして反対論が起った。

江戸の家田大峰、市川鶴鳴、豊島豊洲、亀田鶴斎、山本北山ら、京都

の皆川棋園、巖垣竜溪、村瀬栲亭、佐野山陰ら、大坂の片山北海、播磨の赤松滄洲らは熱心に反対した。

その主張は、学問の研究には自由が必要であり、孝悌忠信、仁義礼楽の根本を失わないことが大切で、統制はかえって学問衰微を招く。あるいは、学問は朱子学のみではない。古学の学問所を別に設置せよ、とする意見も提出されたが、採用されず、ついに一般的に朱子学が盛んになったことは事実である。

しかし、名古屋藩は、家田大峰が藩主侍講であり、のちに藩学明倫堂を主管し明治に至るまで己れの折衷学を通した。

そのほか親藩、譜代藩もとより外様まで、幕府の言う異学を依然として立てて藩学とし、幕末に至った諸藩が相当あった。

次に、それらの藩名をあげる。

○陽明学Ⅱ高知

○古学Ⅱ秋田、長岡、菰野、津、

久居、和歌山、竜野、福山、岩岡、

松山

○徂徠Ⅱ学庄内、高遠、金沢、丸岡、

名古屋、大垣、彦根、岸和田、郡

山、出石、尼崎、鳥取、徳山、萩、

長府、清末、高松、武雄(佐賀支

藩)、熊本、中津、岡、延岡、飢肥

要は、徳川幕府の大学頭として特別の権威を与えられていた林家の朱子学も後代になると正統の教義とする学力を失い、学堂に諸学派まみちの講義が行われる有様であった。教官の最有力者であった、佐藤一斎が陽明学を講じたことはよく知られる。老中松平定信による寛政改革の一つが「異学の禁」であったのであるがその効果は幕府およびいくつかの藩に採用されたが、松平定信の失脚とともに禁止令も廃止された。

朱子学が、最初から徳川幕藩体制に正当的教義として確立されておればともかく、一方で仁斉学(古学派という)や徂徠学(古文辞学派という)、これに陽明学など独創的な儒教思想の多彩な発展を可能にするとともに、国学、心学から蘭学まで儒教以外の学派、學術の勃興をもたらした徳川日本の知識層に大きな知的自由を享受させたのである。これにより開かれた態度をとりえた一つ理由は、ここにあるといえる。

(参考文献)

(1)吉川弘文館『国史辞典三卷』

(2)笠井助治著『近世藩校に於ける学統学派の研究(上・下)』

(3)佐藤誠三郎著『死の跳躍』を越えて—

西洋の衝撃と日本—

染色「直心是道場・達磨図」作の由来と

能古博物館寄贈を語る 大山 右一

私の達磨は、洋画・日本画の域を脱した手法で「八女の手漉き」和紙に染料と木蠟を使用しました。染料は発色のため水に浸さねばならず、色を加える度に水浸しをくりかえすので並みの紙では駄目になります。



染色「直心是道場・達磨図」
大山右一作

さを痛切にしています。達磨像のはじまりは、今は亡き太宰府戒壇院の禅僧「大西真応師」の方は大分の高崎山の猿を育てた猿和尚として高名な方でもありました。私が戒壇院で教えを受ける中で、老

に現在、私の「川柳」修行がつづく中で、会と能古博物館のつながりの深さを知るに及び「達磨図」の寄贈が実現した次第です。しかし、これに至るまで、姪浜川柳会の末松仙太郎主幹と同会事務局長吉原湖水、また能古博物館理事長庄野寿人氏ほか関係各位の熱心なご協力に深甚の謝意を表します。

春塵を払い達磨と宴する 右一

また四月十一日、小生の達磨図贈呈を記念されて、姪浜川柳会は会友諸氏多数のご参会を得て能古博物館に於て句会を開催され、私のために式事を持たれました。ここに、本誌紙上を借りて厚く感謝を申しあげます。

○染色「直心是道場達磨図」に付する自題と賛の句

【自題】

○起承転結達磨転んで 決めている 大山 右一

○母子家庭父を演じる 達磨の目 吉原たみ子

○ひとときを達磨と語る 能古の春 原口 虎夫

○欠伸一番もう九年かと 大師言ひ 板木 継生

○面壁九年達磨は光る

海を見た 野田 はつ

○達磨見習い無一物

無盡蔵 吉富とき代

○色即是空逆も真なり

達磨の目 末松仙太郎

○空漠々達磨も壁も

喝解脱 吉原 湖水

姪浜川柳会主催

大山右一作・染色「達磨図」

祝賀披露句会の報告

とき 平成五年四月十一日
ところ 福岡市西区能古

亀陽文庫・能古博物館

司会と進行 吉原湖水

一、開会挨拶 会長 末松仙太郎

二、祝辞 能古博物館館長 庄野寿人

三、挨拶 染色達磨絵作者 大山右一

四、雑詠互選(三句選・投票・集計)

五、推薦句講評 高木千寿丸

六、閉会(板木継生)

その他担当 協取り 継生・とき代

受付 継生・とき代・虎夫

会計 継夫

【推薦三句】

○大筆小筆つくしは空を

キャンパスに 蔵田はつよ

この工程で何度も失敗を重ねた結果八女の和紙が最も強じんなことを知り着色可能を得ました。こうした実験のくりかえしで自分の未熟を知ったことは、良い体験であったと思いますが、これで万能とは決して考えておりません。

師と共に「福岡県立美術館で一人展」つまり老師の墨跡に私の絵佛にちなんだ造形を発表しました。即ち「直心是道場」にされるものです。従って、此の達磨像は私の最初でおそらく最後になる「一品作」であります。

もともと、私と亀陽文庫・能古博物館の縁は「姪浜川柳会」、この会

○押し売りの息もつかさず

褒め殺し 墨 羊子

○老いてなお耳の確かさ

疎とまれる 西 和子

【互選・得点上位五句】

○乾し草の匂い私は

生きている 村上 公美

○蝶よ花よいつか一人の

川渡る 長井すみ子

○達磨絵と花にも酔わん

能古の春 小出 青六

○大筆小筆つくしは空を

キャンパスに 蔵田はつよ

○春の袂、淡いナサケを

受けとめる 林 千代子

○故郷に待つ人もなし

桃の花 高辻ふさの

○親離れ少年春の

笛を吹く 小野 冬子

○然り気なく生きても背中を

つかれる 糸山好太郎

○草に寝て天に野望の

孤を描く 八尋いさお

○逢いにゆく風はほのかに

香り持つ 武藤 瑞こ

○雲と歩くシルバー手帳

ふとところに 原口 虎夫

○やがて逝く見せばひとつ

ふとところに 杉岡 静子

多久聖廟春季釈菜

参列の記

亀陽文庫理事長 庄野 寿人

平成五年四月十八日、多久聖廟春季釈菜に参列した。わが知友の尾形郷土資料館長は、釈菜執事者の一人...

テレビ報道班が収録のため機器を真横に据え付けられたので最良の場所を占めていたことがわかる。...

やがて執事者(釈菜執行員のこと)十七名が首席を先頭に入場、執事者の首席は献官(これは多久市長の百崎さんが自ら勤められる)を称する。...

亀陽文庫・能古博物館友の会

- 〔福岡市〕 天谷千香子③・西嶋洋子③ 岡部六弥太③・坂田泰滋③・鬼塚義弘③ 村上 靖朝③・片倉静江③・星野万里子③ 小田一郎③③・速水忠兵衛②③・亀井准輔③ 桑形シズエ③・吉村雪江③・財部一雄③ 橋本敏夫③・上田紀子③・三宅碧子③ 安松勇一③・上田良一③・西村忠行③ 高田浩二③・片岡洋一②③・桑野次男③ 玉置貞正③・山内重太郎③・星野金子③ 石川文之③・木戸龍一③・中畑孝信③ 黒川邦彦③・岩重二郎③・西島道子③ 吉原湖水③・原 重則③・石橋七郎④③ 藤木充子③・和田慎治③・西川真澄③ 岡本金蔵③・青柳繁樹③・横山智一③ 末松仙太郎③・板木継生③・行成静子③ 池田邦夫③・浦上 健③・宮崎 集③ 都筑久馬③・吉村陽子③・斎藤 拓③ 石橋観一③・桃崎悦子③・古野開也③ 西 政憲②・林十九楼③・大神敏子③ 安永友儀③・鶴田又三子③・磯崎啓子③ 岩下寿美子③・土屋正直③・森 真吾② 三角健一②・織田喜代治②・甲本総太② 上田 博②・西尾健治②・伊藤康彦② 石橋清助②・塚本美和子②・長八重子② 岸 洋子③・古賀清子③・前田静子 田中和子③・黒川松陽③・谷健太郎 田中寿夫③・花田郁子③・日野和子 肥塚善和③・寺岡秀實③・隈丸清次 野口 隆③・奥田 稔③・原田種美 長尾茂穂③・松尾治郎③・川島貞雄 井上敏枝③・平河 涉③・石村マン 藤野幸子③・富重芳子③・葉山政志 星野 玄③・半田耕典③・久芳正隆 藤島正稔③・原口虎夫③・吉富とき代 福田満寿美③・野田はつ③・大山宇一 児島順子(前原市)由比草祐③(大野城市)

- 伊藤泰輔③・田代直輝③・藤 穂積 山田 栄③・久野敦子(春日市)後藤和子③ 白水部(筑紫野市)横溝清③・脇山浦一郎③ 川浪由紀子③・原 富子③(太宰府) 中村ひろえ③・古賀謹二③・佐々木謙③ 平岡 浩②・西尾弘子②(筑紫郡) 結城慎也③③・(粕屋郡)神崎憲五郎③ 榎田正己③・榎田猶子③・酒井俊寿③ 青木良之助③・友野 隆②・鈴木惠津子② 川原敏子(宗像市)木村秀明③・益尾天嶽 (甘木市)佐野 至③・酒井カツヨ③ 呉嶋菊乃③・宮崎春夫③・井手 太③ 田中トクエ③・富田英寿②・井上 清③ (朝倉郡)鬼丸雪山③(飯塚市) 小山元治③(浮羽郡)吉瀬宗雄③ (大牟田市)嶽村魁③・古賀義朗③ (苅田町)木下 勤③(北九州市) 片桐三郎③(筑後市)中島栄三郎 (久留米市)庄野陽一③・野瀬邦夫(直方市)山本利行③(佐賀県)甲本達也③(大分県)寺川泰郎(熊本県)浜北哲郎③ (山口県)大塚博久②・平野尊識② (大阪府)小山富夫②③・前田敏也子② 松村浩二(滋賀県)辻本雅史(愛知県) 杉浦五郎②・庄野健次②(神奈川県) 中野晶子②③(東京都)片桐淳二③ 山根貞与②③(千葉県)間所ひさこ 森 久③(埼玉県) [北海道]船越谷嘉一

【協賛会員(個人)】

- 片桐寛子(福岡)③・中村 登(福岡)③ 大里豊男(福岡)③・広瀬 忠(福岡)③ 笠井徳三(福岡)③・永田蘇水(福岡)③ 菅 直登(福岡)③・大坪正治(福岡)③ 野口 一雄(福岡)③・奥村宏直(福岡)③ 荒木靖邦(福岡)③・早船正夫(福岡)③

式事は、次第により進む

献 饌 祝者が開扉し、執饌が棗

(銀杏)・栗・芹・筍・雉肉・飯

・餅を運び祝者が孔子に供える。

点 闕 掌儀がお供えを検する。

詣香案前 献官は正壇・香机前に立

上 香 お香をあげる。

俯伏・興・拝・興・拝・興・平身

(ひれ伏す、立つ、拝む、立つ、

拝む、立つ、二元の姿勢に戻る)

(中略)

詣祝位

祝者が献官のために祝文

の準備をする。

衆官皆跪 祭官全員ひざまづく

祝 祝者が献官より祝文を受

けて読む。

「維、平成五年、歳は癸酉に次る

春四月朔越えて十有八日

肥前多久市長百崎素弘、祭事を司ど

り敢て昭に至聖・先師文宣王に告す

惟に師徳は天地に配し道は古今に冠

たり

六経を刪述し憲を萬世に垂れたもう

茲に恭しく積菜の礼を修めん

尚 は響たまえ

次は献詩の儀に入る。

詣読詩位 (祝者は献詩の準備をする)

衆官皆跪 (祭官全員ひざまづく)

詩 讀 (祝者は献詩小序を先ず奏す)

献詩小序 (訓読する)

「維、平成五年四月十八日

恭安殿に事有り、是に於て諸執事及

び陪祭の徒、例に従つて共に古今の

體三十四首を賦して献奠の間に諷詠す

未以て至徳の萬一を賛するにたらず

と雖も亦、各々其の志を言う耳、伏

して惟んみれば照鑑したまえ」

註 献詩三十四詩は、作者の住所氏

名を披露される。また詩作は別紙に

印刷され、参列者全員に配布される。

内訳は、五言絶句二、七言絶句二四、

五言律詩二、七言律詩六、計三十四

首。献詩者は地元の多久市七。佐賀

市七。武雄市二。鹿島市一。唐津市

一。鳥栖市二。東松浦郡二。佐世保

市六。平戸市一。筑紫野市一。福岡

市三。不明一。の各地方から寄せら

れている。

詩題によって時局を反映したものと

もあり、とくに政治腐敗を孔子に訴

える内容二が見受けられる。詩題に

「世相退廢楮樹に嘆ず」、「献積菜難

政局」とあり、「今来政客は金権を

恣にす、世情混沌方に此に窮まれり、

学ぶべし選良先哲の賢と。国民愛國

の至情がうかがえる。

献詩の内、七女性作品あり。

- 安陪光正(福岡) ③・浄満寺(福岡) ②
 花田加代子(福岡) ③・梅田光治(福岡) ③
 沖 双葉(福岡) ③・熊谷雅子(福岡) ③
 七熊澄子(大宰府) ②・木原敬吉(飯塚) ③
 大久保津智夫(嘉穂) ③・庄野直彦(直方) ③
 原田國雄(宗 像) ・森光英子(久留米)
 江崎正直(大牟田) ②・緒方益男(佐賀) ③
 中山重夫(唐 津) ③・七熊 正(佐世保) ③
 七熊太郎(佐世保) ③・伊藤 茂(芦屋市) ②
 小堀定泰(滋 賀) ②・西村俊隆(東京) ③
 白水義晴(東 京) ③・多々羅幸雄(千葉) ③
 西喜代松(北九州)
 会員ご氏名に③は、会費ご継続三年目
 をいだいたしるしです。
 (一) は多年分のまとめお払い込み、()
 は増口数ご負担を示します。
- 【協賛会会員(法人)】
 流通 共 濟 (株) 花田積夫(福岡)
 タイム社印刷(株) 安部博満(福岡)
 (株) 笠 組・笠 忠夫(福岡)
 博多ちくわ(株) 魚嘉・松尾嘉助(福岡)
 権藤税理事務所・権藤成文(福岡)
 協 通 配 送 (株) 今林 昇(福岡)
 大牟田運送(株) 南誠次郎(福岡)
 山谷 運 送 (有) 山谷悦也(東京)
 (株) 三島設計事務所・三島庄一(福岡)
 西尾トラック運送(株) 西尾秀明(福岡)
 日 西 物 流 (株) 原 重則(福岡)
 東洋特殊機工(株) 西尾敏明(福岡)
 橋 詰 工 務 店・橋詰和元(福岡)
 愛宕建設工業(株) 野村六郎(福岡)
 九州三菱ふそう自販(株) 宮崎慶一(福岡)
 (有) 愛光ビルサービス・野田和禎(福岡)
 (有) クリールン開発・野田和禎(福岡)
 延 寿 産 業 (有) 池田邦夫(福岡)
 西 日 本 急 送 (株) 原 重則(福岡)
 (有) 安河内商店・安河内紀男(福岡)

※新規ご御加入(先号以後、平成五年四月十日まで)は、右の地区ごとに記載いたしましたので、何卒ご芳名をご確認ください。
 ありがとうございます。

友の会 年間3千円
 (館の活動、館誌購読と催事企画に参加)

自然と文化の小天地創造

能古博物館の会

協賛会(個人) 年間1万円
 (法人) 年間3万円

館維持、資料収集、施設整備等の資金援助を受ける

納入方法 郵便振替 福岡3160970
 財団法人 能古博物館

右の会費受領は、その都度本誌に掲載以後会費相当期間を名簿にします。

「お願い」ご送金は振替用紙(送料加入者負担)をご利用下さい。用紙はご連絡次第お送りします。

図書出版

『閨秀 亀井少稜伝』
 詩、書、画の作品で仙居の次に多いのが同時代の亀井少稜。しかも少稜には艶麗な漢詩の恋歌まである。これが同女の作か否か。これに始まる探究の書である。
 B5版・表紙有装美本
 限定 二、〇〇〇部
 図録全カラー50頁・本文94頁
 直売価格 三、〇〇〇円
 (送料 三二〇円)

本館第四号展示室・出展中の「上野焼土白堊品」の紙上紹介

○木の葉大皿



葉脈を線刻で地紋に、彩釉も淡く使って盛物を活かす心意気の作。

○軍配形の盛皿



上野特色の彩釉を控え目に使い、軍配芯軸と日月文様は浮き文にする。

○捻り手付盛鉢



上野釉を濃い目に、ずぶ掛けし、渦巻き文を一気に描いて屈託がない上手もの。

○素麺手渦巻き文徳利



上手の酒徳利とされる。上野特有の白滝釉を

押出した渦巻文の出来映えが良い。

○白釉打ち付け花生



これも上野特有の白釉を無造作に打ちかけた

作品とされている

文庫「孔子廟」創立にご寄付のお願い

文庫の「孔子像」については当館誌第14・15各号記事として概要を説明しました。その後、東京の湯島聖堂・多久聖廟との連携、次で当館支援者の協議を経て二月十一日創立準備委員会開催、これで発起人ご委嘱を得ました。

以来、発起人各位よって主に企業関係に建設費の協賛を要請しておりますが、個人の方々からもご協力のお申出であり、感動いたしております。ついでには各位のご芳名を礎石に刻し、聖廟創設の歴史にさせていただきます。

これによって文庫聖廟を亀井学顯彰と地域文明を担う施設として広い認識を得ることになります。例えば、多久聖廟から分与された「楷の木」は、すでに新葉を出しています。しかし、花と実を付けるのは十五年後です。私の代は見られないと思いますが、次の世代では結実

播種され、楷樹の叢林が名所になるのは、さらに一世代後に実現するでしょう。それでも、いま我々は中国孔府里の悠久、二四七〇年を茲に植えた事実で大満足にします。

何卒、皆さま、この趣旨に於て世代の歴史を茲に共同して創るうではありませんか。謹んで提唱申します。平成五年五月

亀陽文庫 庄野寿人

一、文庫聖廟創設予算

- 建設費(内蔵厨子共) 一三、二〇〇千円
- 楷樹、杏子植樹造園費 二、二〇〇千円
- 参道・境域の整備工事費 三、三〇〇千円
- 付属施設(講堂、化粧室) 六、六〇〇千円
- 計 二五、三〇〇千円
- 二、個人募集予定 四、八〇〇千円
- 三、振込み口座 福岡銀行本店

普通預金
口座番号 22697341
振込先 助亀陽文庫理事長 庄野寿人

○なお電話連絡いただければ、郵便振替「振込料金無料扱」の用紙をお送りします。

発起人(順不同)

- 町田 三郎 今林 昇
- 九大文学部教授 協進送園社長・文庫理事
- 出光 豊南 誠次郎
- 新出光社長 大牟田運送園社長・文庫理事
- 堤 克彦 佐々木 哲哉
- 弁護士・西南大法律部 用賀石炭資料館長・文庫理事
- 荒木 邦一 小田 一郎
- 荒木法律事務所長 箱崎埠頭興業社長
- 遠山 寿一 高原 敬治
- 出光興産・総務部 文庫評議員
- 西村 俊隆 藤成 文
- 山崎東京事務所 税理士・文庫監事
- 原 重則 野田 和禧
- 日西物産・日本製菓 多摩市歴史資料館長
- 笹原 武白 水義 晴
- 新栄社長・文庫理事 都正設計園社長・文庫理事
- 三島 庄一 広瀬 忠
- 三島設計社長 福岡出雲大社宮司
- 聖廟式事指導 尾形 善郎
- 多久聖廟釈菜担当・多久市歴史資料館長
- 東京・湯島聖堂釈菜嘱託・全国孔子聖廟調査
- 事務局担当 池田 邦夫
- 文庫監事 翠川 文子